

松尾典子 「長崎壊滅の日記」

原爆前日まで

戦局の悪化に伴い昭和20年3月、私は学徒動員先から、グラバー邸に近い長崎要塞(ようさい)司令部(長崎市南山手町、現在地・長崎海洋气象台)に通信事務を担う軍属として採用された。司令部に入ってくる軍事情報によると、B29の焼夷(しょうい)弾攻撃で国内の主要都市は廃虚と化し、8月6日には広島に特殊爆弾が投下され、甚大な被害があったという。特殊爆弾がどんなものか分からぬまま、あの日を迎えた。

8月9日

「11時島原西進のB29二機長崎クハ(空襲警報発令)」。通信室で声がしたと思った瞬間、パッと入り口から閃光(せんこう)が走り、ものすごい爆風にガーンと耳が聞こえなくなったと思いながら交換台に必死で伏せた。

司令部に落ちた、いや新型爆弾か、浦上方面は火の海だと口々に叫ぶ。間もなく負傷者の縫合手術が行われ、狭い地下室は血生臭い空気がよどんだ。皆、家族の安否を気遣い、不安が広がっていった。

市内各所に派遣された兵隊さんから被害状況が刻々と入ってくる。「長崎駅から先は進めない、浦上方面の被害は言語に絶する、長崎市の半分は壊滅...」。私たちは絶望的な気持ちで「帰らせてください」と訴えるが、「今行ったところでどうにもならない」とみんなに引き留められた。

夜八時やっと勤務を解かれ、外に出た。司令部の上空までどす黒い雲に火の光が映り、浦上方面は燃え盛る。涙が止まらなかった。今、家が焼け、家族が死んでゆく。宿舎に引き揚げず、一晩中泣きながらぼう然と火の海を見ていた。

8月10日

私たち浦上方面の者は早朝、被害報告の義務を背負わされ兵隊さんとともに司令部を出発した。

早くも炎天下。県庁は半分焼け、長崎駅一帯は死体が目に付く。馬は空気を入れられたように膨らんで倒れている。突如、空襲警報が鳴り響き、がれきの物陰にかがみ込んだ。鈍い音とともに白く光り輝くB29が飛んできた。上半身が吹き飛ばされた兵隊さんを見て、思わず目を背けた。

ものすごい火炎を上げる銭座国民学校。道路の両側は死体が散乱、もはや目を背ける余裕もない。道路の土も真っ黒に焼けている。暑さと、熱気と、異様な臭気で気が遠くなりそうだ。茂里町の製鋼所、浦上駅も鉄骨がアメのようにグニャグニャに曲がっている。山王神社の鳥居が片方の足だけで立ち、医大の煙突はへし曲がり今にも倒れそう。浜口町、松山町一帯の被害が一番ひどかった。

正午すぎ、ようやく松山町に着いた。城山に入ると焼け残った倒壊物などで一歩進むのにも困難を極めた。城山国民学校の正門がけ下では、兵隊さんが無数の死体を一カ所にまとめている。この学校で教師をしていた姉喜美子=当時20歳=は大丈夫だろうか。「もし

やあの中に」と恐る恐る近寄ると、目を覆いたくなるほどの無惨な死体。爆死はこうゆうものか。この辺りの死体は黒こげでなくパンパンに膨らんでいた。赤茶けた肌の色、目玉は飛び出し、おなかは破れ、丸く開いた口からは内臓が飛び出している。姉の洋服が見あたらないのでホッとした。

生き残った人たちは炎天下の道端でギラギラと照りつける日光をまともに受けて横たわり、「助けてください」と苦しんでいる。私は目を覆いたくなった。

爆風で真っ二つにおれた大木を目印に、城山国民学校裏手の自宅（城山町2丁目）へ向かった。兵隊さんとともに悪路を上り歩いた。がれきに何度も足を取られ、我が家があったらしい場所にたどり着いた。

近所の人たちが私の目に飛び込んできた。「ああ典子さん、よく帰ってきたくれたね。みな防空壕（ごう）の中にいますよ」「えっ、みな元気なんですか。本当にありがとう」と駆けていくと、家は全焼。防空壕に行こうとすると、隣のおじいさんが「気をしっかり持ってゆくんですよ」と声をかけられ、思わずその場にしゃがみ込んだ。

兵隊さんに励まされ横穴の防空壕に着いた。だが二本の大木が父一枝＝当時56歳＝に覆いかぶさっていた。既に死亡していた。中をのぞくと、一家の中心で隣組の防空班長をしていた姉恵美子＝当時23歳＝は全身やけどで横たわり、弟高明＝当時12歳＝も青い顔でうめく。そんな二人を母元子＝当時52歳＝がしょんぼり座って見守り、その横にはこれも全身やけどの近所のおばあさんも一緒にいた。

「お母さん」「ああ典さん、よく帰ってこれたね。お父さんを見てちょうだい。あんな格好で死んでしまって」。姉は「典ちゃん、こんな顔になって、死んだ方がましよ」と声を震わせる。「普通のやけどと違うから傷は残らないそうよ」と私は慰めたが、姉は黙ってしまった。弟は本当に苦しそうにうめいている。

私は涙が出るどころか、身の引き締まる思いがした。司令部から持参したおむすびはどれも食べようとしない。汚れていない遠くの井戸に水をくみに行き、みんなに飲ませた。弟の顔をきれいにふいてやり、姉と弟の額にぬれ手ぬぐいをそれぞれのせてやった。

兵隊さんが「もう時間だから報告に帰らなくては」と言われる。私は驚き「皆がこんな状態なのに放っておくのですか」。隊長殿の命令だから。姉にも「行ってきなさい」と言われ、私も軍の命令だからと観念し「お母さん、頼みます」と後ろ髪引かれる思いで壕を出た。結局、死んだ父を倒木から出してやることはできなかった。

司令部に帰還し「父即死、姉行方不明、母、姉、弟三人負傷」と言葉に詰まりながら報告。初めて涙があふれた。隊長殿は「気の毒に思う」と下を向かれ「一人で帰れるか」と気遣ってくれた。やっとのことで許可が出て、「元気な私がしっかりしなければ」と自らに何度も言い聞かせ、城山の防空壕を目指し南山手の石坂を駆け下った。「早く帰りたい」との一心で、道端に転がる死体が怖いと思う余裕はなかった。

日も暮れ、防空壕の中には苦しむ弟と姉、しょんぼり座っている母、倒木に押しつぶされたままの父。私は急にどうしようもない心細さと寂しさに襲われた。顔見知りのおばあ

さんは既に息を引き取り、もういなかった。

気落ちしてばかりはいられない。みんな水を欲しがり下痢が続いた。昼間拾っておいた洗面器や、やかんに水をくんできて飲ませ、高熱にうなされる姉の額にぬれタオルをのせ、空き缶で便を取って遠くに穴を掘って埋める。もう辺りは真っ暗。何度か水くみに行き、汚物を埋めるうち、夏夜は白みかけてきた。朝から何も食べていないのに空腹感はなぜか感じなかった。

8月11日 =被爆ノート48=

防空壕での暗やみの夜は長かった。皆は絶えず水を求め便意を訴える。暗い中を水くみに走り、汚物を何度も埋めるうち東の方が明るんできた。

防空壕を出入りするたびに、お父さんの姿が目についてつらい。死んではいるものの、あの重い倒木に押しつぶされているのは苦しそうで見るに忍びない。

お昼ごろ、防空ごうの中ばかりでは気がめいるので、簡単な日よけをした所に皆を移すことにする。弟を動かして驚いた。下を向いていた方のほおはすれて青黒くはれ上がり、背中と首に深い穴があいている。それで今までずっとうめいていたのだ。「高明ちゃん苦しい」と尋ねると、大きな目を潤ませてうなずいた。

こんな罪もない子どもまで苦しめるなんて。突然、私は怒りのあまり涙がほおをつたった。痛がる弟を少しの辛抱と心を鬼にして運ぶ。ひどく胸の痛さを訴える。家の下敷きになった時、ろっ骨を折ったのではないだろうか。

姉を明るい日の下で眺めた時、私は胸をつかれた。こんなひどいやけどを負いながら弟を倒壊した家の中から助け出し、その夜は弟を背負って火の海を逃げ回ったからだ。貴重品袋を取り出すことができず謝っていた姉。弟を背負ったのでやけどした腕の皮膚がベラッとむけてしまっている。病弱な母の代わりに一家の支えになってきたその気持ちが、こんな重傷を負いながらも弟と母を救い出させたのだろう。

防空ごうの外は照りつける太陽でかえって悪かった。また防空壕へ戻ることを思ったが、皆は苦痛のため動けない。私は姉の髪をすいたり弟の足をさすってやった。

午後、ようやく要塞(さい)司令部から兵隊さん三人が、やけどの薬を持って来てくださった。お父さんの遺体が出してもらえる。しばらくして兵隊さんが「最後なんだからみときなさい」と呼びに来てくださった。でも私は行かなかった。変わり果てた無残な顔を見るのは怖い。何度も呼びに来てくださったけど、どうしても行けなかった。

日暮れ。兵隊さんも「明朝、お骨を拾いなさい」と言い残して帰って行かれた。また暗く長い夜を思うと、なんとも言えない寂しさに襲われて気がめいってしまう。やはり皆を防空壕に入れなければ夜露は毒だろう。明日はもう防空壕にいよう。

8月12日 =被爆ノート49=

今朝は母とともに父のお骨を拾い、花瓶に入れて防空ごうの中に安置する。

昨夜も私がくんでくる水で母は一晩中、姉と弟を交代で冷やしていた。「典子さん、あんまり無理しないで少し寝なさい。あなたか倒れたらどうにもならないから。何にも役に立

たないお母さんが生き残って、お父さんと代わっていたらあなたたちだってどれだけ心強いかわからないの」と言う。でも弱かった母がこうして元気で姉たちの面倒を見てくれるので私にはどれだけ支えになっているかわからない。待望の夜明け、今日もまたお天気だけはよい。

8月13日

朝から爆音が聞こえてくる。被害状況を見に来たのか。私はもう敵機など怖いと思う暇もない。

今日は救護班から、上の方は治療に行けないから城山国民学校まで動ける人は来るようにとの達示があった。お姉さんはこんな格好で行くのは嫌だと言う。

弟だけでもと思って、苦しがるのを背負って休み休み長いことかかって、やっと治療所にたどり着く。やはりろっ骨が折れているとのこと。出血が多かったので欲しがってもあまり水分を取らせないように、出血多量の患者に水分を与えて死亡することがあると聞かされてがく然とした。今まで沸かしたのならと苦しがるままに飲ませていた。恐ろしいこと、大丈夫だろうか。薬を持っているから姉の治療に来てくれるようにくれぐれも頼んで、帰りは弟を抱きかかえて行く。

学校にいた姉はどうなっただろう。先生方、助かった人はいないのかしら。苦しがる弟を連れては捜し回ることもできない。元気な人の力が欲しい。姉も捜さなければかわいそう。

帰る途中、鎮西中学の安部先生の娘さんの和子さんに出会う。皆亡くなられ、妹さん一人生き残っていたとの事。「お互いに頑張りましょうね」と励まし合って別れた。

壕(ごう)に入る手前で、先隣のお姉さんが目を開けたまま亡くなっている。かわいかった赤ちゃんは家の下敷きに。おばあさんはかまどの所で焼け死に、ご主人は出征中。おじいさん一人残っている。

今日もまた夕方になったが救護班の人はとうとう来てくれない。また嫌な夜。弟のお水を欲しがるのには胸をえぐられる思い。

=被爆ノート50= 8月14日

昨夜はお母さんと今後のことを話し合った。この後どこに行くのか。親せきが一軒もない長崎に住んでいる心細さ。親せきのいる八幡に行きたいが、あそこも製鉄所があるから空襲が激しい。またこんな目に遭うのは嫌だから、(父の出身地の)熊本の田舎に行った方がよいだろうと、残った二、三枚の着物でそれぞれの着るものを作り、お姉さんと高明が少し良くなったら行くことに話が決まる。

汽車は負傷者を諫早方面に運ぶためノロノロと浦上まで入って来ている。

今日まで伊王島の父の会社からはだれも来てくれない。母は学校に行ったきりの下の姉が帰って来た夢を見たそう。まあうれしやと思ったら目が覚めて、周囲は変わり果てた防空ごうの中。私は「お母さん、学校の先生たち、諫早の病院に運ばれたそうよ」と昨日救護班の人が言われたことを繰り返すが「いいえ、(二女の喜美子が)生きていればこま

でどんなにしても帰って来るでしょう」と言う。横から姉も「そうよ。家のこと心配してどうしてでも帰って来ると言う」と言う。

家から城山国民学校まで五分もかからなかった。夕方帰りの遅い喜美子姉さんを、よく私と弟が迎えに行かされた。「またピアノの練習をして時間のたつのも分からずにいるから」と母に言われて行くと、暗く静まり返った校舎の奥からピアノの音がしていたものだ。どんな死に方をしたのだろう。家族から離れてたった一人で。でもきっと仲良しの先生方と一緒にあったろうと自分に言い聞かせる。

午後、初めてここまで救護班の人が来てくれた。お姉さんも今まで治療してもらうこともできず、せっかくのお薬も、ガーゼも何もなくて塗ってやることもできなかった。ただれていた皮膚もだいぶ乾いていくらか見よくなってきている。

母は、傷は残らないか、今後の治療法などを聞き、弟のことも、ろっ骨が折れていても命に別条はないかなどと細々と質問している。ろっ骨を取っても元気に生きている人の話を聞かされ、私たちはどんなに喜んだかしのれない。

久留米の陸軍病院の看護婦さんが「私の家も空襲で焼けたそうよ。あなたも皆のためにしっかり頑張るね」と私に言い、弟にも「今少し我慢して早く元気になりなさいね」と励まして行かれた。

昨日から家に貯蔵してあったバレイショ、玉ネギ、カボチャなどを煮て食べることにした。炊き出しのおにぎりも下の方には来ているそうだけれど、もらいにいく余裕がない。

今日は、父と姉が日曜ごとに手入れして作っていたサツマ芋を掘ってみる。結構大きくなっている。食糧難な時代だけに皆、サツマ芋の大きくなるのをどんなに楽しみにしていたことか。父にもお供えして皆も食べたのだが、やはりあまり食欲はない。

=被爆ノート5 1 = 8月15日

昨夜から姉が高い熱を出して、そばにいただけで熱気を感じる。「顔は火が燃えているみたい」と言う。やけどで皮膚がはがれているうえに高熱なのでそう感じるのだろう。時々正気になってそんなことを言うかと思うと、また熱にうかされてうわ言を言ったりする。一杯の洗面器の水がすぐお湯のようになる。何度も外の井戸まで暗い道をたどって水を集みに行く。そばに死体がころがっていても、もう怖いとも思わない。母は黙って祈るような気持ちでいるのだろう。タオルを絞って額にのせて冷やすことを繰り返している。

【姉の死】

明け方近くと思われるが、外はまだまだ暗いうち、姉はフーッと大きな息を一つしたかと思うと呼吸が止まった。このとき初めて今まで泣き顔も見せなかった母が姉にすがって泣き出した。私もそんな母の姿を見て後から涙があふれてどうしようもなかった。

弟は相変わらずうなっている。今まで頼りにしていた姉に死なれて母はがっくりしたようだ。私はどうしようもなく先隣のおじいさんに知らせに行った。お隣は四人も元気な人がいたが、もう親せきの家にでも引き揚げたのか、だれもいない。おじいさんは一人ぼっちになってぼんやりしてられるが、とにかく来てもらった。おじいさんは壕(ごう)の

入り口で火をたいてとにかく夜明けを待ちましようと言われた。

姉の手を組ませてあげようとしたら、もう硬直していてボキッと鈍い音がした。あんなに苦しんで死んだから硬直が早いのだろうか。今まで座ったままだった母は急に気落ちしたのか、横になったまま物も言わない。私は急に心もとなく寂しくなってしまう。

やっと夜が明けたが、私一人の力では姉を壕から出すこともできない。死ぬとこんなに重くなるものだろうか。おんぶすることもできない。母は思考力を失ったようだ。私の力にもなってくれない。どうしたらいいかと一人思い惑う。

お昼前、父の会社の丸尾さん夫妻が訪ねて来られた。会社の船がちょうど戸町のドックに上がっていたとか。父は伊王島にいるものとお見舞いのつもりで来られたとか。死体の浮かんだ川に漬かったりしながらやっとここを捜し当てたと言われる。「お姉さんは何ということに」「奥さんしっかりしてください。私たちが力になります」。地獄で仏とはこんなことかしら。私は二人の方に万人の力を得た気がした。

【姉の火葬】

テキパキと母と弟を壕の外に出し、姉も出して木片を集めて焼く支度をし、しけた防空壕の中の物を日に干し、持って来たおにぎりを私に食べさせてくださった。「お嬢さん、どんなにか心細かったでしょうに。よくここまでしなされた。それにしてもお父さんが亡くなっていられるとは」と絶句された。

やがて私が姉に火をつける。炎天の下、野焼きをする。物すごい炎、におい。
=被爆ノート52=

かわいそうなお姉さん。とうとういなくなってしまったね。教師をしていたのに、母が体が弱かったので学校を辞めて、私たちの着るものから、おふとんの縫い直し、食事の支度、何でもやっていた。近所の方たちからも、もうよいお嫁さんになれると言われていた。若いのに楽しい思いをしないで働いてばかりいた姉が、こんなに苦しんでこんな死に方をしようとは。

夕方、父のときは母と二人でお骨を拾ったが、今では弱ってしまって母はもう動こうともしない。そんなに姉の死がショックだったとは。

防空ごうの中もカラッとしたので、丸尾さんは母と弟を寝かせて「また来ますから、お嬢さんしっかり頑張ってお母さんたちをみてあげてくださいよ」と夕闇（やみ）せまる中を二人で帰って行かれた。

また嫌な暗やみの夜が来る。姉のいなくなった壕の中は急に広くなった。母と弟が横たわり、私は二人のそばにシヨンポリと座る。

8月16日

ただ黙って横になっている母と、苦しむ弟の看病。何も食べる気力もない。水をくみに行くと「戦争が終わったそうな」と耳に入る。またデマだろう。何の感動もない。

8月17日

今日、伊王島から会社の田原さん夫妻、深川さん、それに炭坑の吉野さんの奥さんがや

っと来てくださった。このころは、船も敵機が低空で来て機銃掃射をするので交通船は通っていなかったの、船を持っている船頭さんにお金はいくらでも出すからと頼んでもなかなかうんと言ってくれる人がなかったとか。やっと今日来てくれる人が見つかって伝馬船で何時間もかかってやっとここまで来てくださったのだ。私は手を合わせたい気持ち。一度に全身の力が抜けてガックリとしてしまう。

田原さんの奥さんがあんなに明るい家庭だったのにこんなに変わってしようとは思ってもしなかったと涙を流される。喜美子さんはどうなったんですかと言われたが、私一人では今まで学校に捜しに行くこともできなかった。とにかく学校まで深川さんと私で捜しに行ってみる。

城山国民学校の運動場にたくさんの死体が集めてある。だれか判別できるような死体はない。辛うじて衣服が少しでも付着していればそれで見つけるしかない。変わり果てた死体を見るのは恐ろしかった。もうない方がよいと思ったり、見覚えのある洋服の色を見ると、ハッとして目をそむけたくなる。結局姉らしい人はなかった。これから伊王島に引き揚げるのに、一人どこかどころがったままになるのではないかとたまらない気がする。

【伊王島へ】

担架を一つ持ってきてあったのに、弱ってしまった母が乗せられていく。弟は背負われて壕を出る。皆が出てしまった後、私はしみじみと周囲を見回してみる。目をつむると、木陰の涼しげなわが家が目に浮かぶ。「お帰りなさい」といつも笑顔で迎えてくれた母。土曜日ごとにいつも伊王島から帰っては家庭菜園で働いていた父。台所にいる姉。中学生になってからは勉強ばかりしていた弟。中間テストでは学年で七番になり、期末では「一番になるぞ」なんて頑張っていたのに。九日はその期末テストの終わった日だった。それから一瞬のうちに変わり果てた壕生活。壕での暗い夜は嫌で嫌でたまらなかった。あとからあとから思い出は尽きない。

= 被爆ノート 53 =

製鋼所の裏の川に止めてある舟まで行く途中、道端の焼け焦げた畳の上に弟が寝かせてある。びっくりした。苦しいからしばらく下に降ろしてと言ったとか。かわいそうに担架に乗せられたらどんなに楽だっただろうに。それを思いやる意識ももう母にはなくなっている。

やっと舟に落ち着いて寝かせ、傘をさしかけてくださった。舟は焼土を後に、のどかな島に向かって船頭さんは一生懸命、櫓(ろ)を漕(こ)ぐ。

長崎港を出て、蔭ノ尾灯台のあたりまで来て伊王島の方を見ると、青々と広がる空と海、緑の島、あんな焦熱地獄なんてまるでウソの世界のようだ。でも母と弟は何をされても無感動。舟の中で、おにぎりを食べている私を見ている弟の目の色、欲しそうな、初めてそんな表情をした。でも食べる力もない。食べてみせなきゃよかった。私は弟がかわいそうでかわいそうで、自分だけ食べるのが悔やまれた。

波止場近くなると子どもたちがたくさん泳いでいる。弟もあんなにしてよく泳いでいた

のに。兄が大学から夏休みに帰ってくると、田原さんの孝さんと伝馬船で沖の方に出るのに、小学生だった弟は平気で深い沖でも泳いでいた。「高明ちゃんも早くよくなって泳ぐようになろうね」と言っても何の反応もない。

簾（すだれ）の下がった涼しい家の中に二つの床がのべられ、久しぶりにのびのびと手足をのばして母と弟を休ませる。ただただ感謝。炭坑病院のお医者さまもちゃんと待っていてくださった。ありがたいことだ。

弟は盛んにお水を欲しがる。深川さんの奥さんが冷やした麦茶をくださる。弟は、私にそっと「井戸端に行ってガブガブ水が飲みたい」と言う。たくさんたくさん飲ませてやりたい。でも治ってもらうためには辛抱してもらわなければならない。麦茶で我慢させる。

【弟の死】

足がしびれると言う。こう炎天下に何も食べないで、体力も尽き果てたのだらうと足をさすってやる。やがて「お姉ちゃんの顔が見えなくなるよ」と言うと言目が据わってきた。私は道端で目を開けたまま死んでいた近所の人を思い出した。そっと、まぶたを合わせるようにさすってやるとつむって、それっきり、あの大きくて綺麗な目はついにもう開くことがなかった。

今まで黙って目をつむって休んでいた母が、何かを感じたように弟の方を向こうとする。お医者さんが「今、注射をしましたから、坊ちゃん、静かに休まれていますよ」と母が力を落とさないためか嘘（うそ）をつかれた。母は私に「高明は死んでしまったんでしょ。手を組ませてやってちょうだい」と言う。「違うのよお母さん、高明は眠っているのよ」と言うけど、母は、静かに目をつむって「とうとう親子四人とられてしまった」とつぶやいた。

やっと家の中でおふとんに寝かせてやることができたのに。たった一時間後に弟は死んでしまった。こんなことならお水をたくさんたくさん飲ませてやればよかった。あんなに欲しかったのに。

=被爆ノート54 = 8月18日 - 母の死

その後、母の容体も悪化するばかり。お医者さん、会社の方たちがつきっきりでまくら元で見守っていてくださる。私はせめて母だけでも助けてくださいと心の中で繰り返す祈った。

お医者さんが、今のうちに何か言い残しておかれることがあったら聞いておいた方がよいと言われる。そんなことしたら母が自分はもうだめだと力を落とすからと言ったが、田原さんがもう聞いておいた方がよいと思われたのか「奥さん何か言っておかれないことはありませんか」と聞かれる。母は「典子が、典子が、勇さん、古川の兄」と途切れとぎれに父の弟と母の兄の名を言った。「典子さんを頼みたいのでしょう。よく分かりました。ちゃんと頼んであげますよ」。母は「典子が、典子が」とだんだんかすかにしか聞き取れない小さな声になりながら、息が切れるまで私の名を言いながら、明け方の四時半ごろ、最後の母まで、私をたった一人残して行ってしまった。

この島は土葬で座り棺なのに、どうして用意されたのか寝棺が二つ用意された。母と弟はその中に入れられ、母のお棺のふたが閉められた。弟のお棺のふたを閉めようとされたとき、突然私は「待って」と弟の死体の上におおいかぶさり、一生もうこの顔が見られなくなると思うと、顔から足の指の形まで頭の中に刻み込んでおこうと必死に見詰めていた。田原さんの「典子さん、さあもういいでしょう。早く舟で運んでもらわなければ人夫さんが待っているから」と私をそっと弟から引き離し、ふたをして打ちつけられた。

ふだんは母が死んだらどうしようと思っていたのに、現実には母と弟の死を前にしてとった私の態度が分からない。きっと若くして死んでしまった未来ある弟が哀れであったのだろう。

高島が見える方の海岸の岩場にお棺は運ばれ、私が火をつけた。深川さん、田原さんの奥さんは手を合わせられ、皆で黙って見詰めていた。

明日、お骨を拾いに来ましよう私を促して帰り出した。私は母と弟から一步一步遠く離れてしまうような気がして、重い足をひきずっておばさんたちと帰った。

上の兄は特別操縦見習士官として戦闘機乗りになり、特攻隊に選ばれて辞世の歌を書いた手紙が来ていたし、もう生きていないかもしれない。母も私一人残していくことで死んでも死にきれない気持ちだったのだろう。命のなくなるまで私の名を呼び続け、叔父たちに私のことを頼んでくれるように会社の方に言いたかったに違いない。苦しい息の下から言葉にならない言葉であったが、母の言いたいことは私にも会社の方にもよく分かった。

母はどんなにつらい気持ちで死んでいったであろう。皆に死なれ、最後に私一人を残していかなければならなかった母の心を思うと胸が痛む。

(了)